



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく : 第5報 美川さんへのインタビューから
Author(s)	松田, 康子; Mstsuda, Yasuko
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 143, 37-61
Issue Date	2023-12-22
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.143.37
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91013
Type	departmental bulletin paper
File Information	06-1882-1669-143.pdf



「精神障害を生き抜くとはいかなることか」 を多様性にひらく

—第5報 美川さんへのインタビューから—

松 田 康 子*

【要旨】 本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査の一端を報告するものであり、第5報となる。本研究は、精神障害を生き抜く“美川さん”の生きられた経験に学ぶ事例報告である。方法は、非構造化面接を用いたインタビュー法を用いた。本研究は、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、「多様性を認め」合うケアの視点、ケアの担い手として応答せずにはいられない物語の発見を研究目的としている。美川さんは、発病による入院をきっかけに、「人間ではないような感じになっちゃったのかな」という思いを抱え、精神障害者当事者組織「すみれ」と出会っていた。社会資源が乏しい時代の当事者活動に美川さんは身をおき、やがて「すみれ」の指導員を担っていった。嫁ぎ先と実家で重ねられた歴史は、美川さんという人を多彩に象っていた。責任ではなくて「自然体で」生きていけばいいと話す美川さんの言葉には、傍らに棲む家人への感謝が滲んでいた。ここに「心の平和」に至る物語及び新たな知見としての自己実現（actualize himself）・成長への助力について喚起されるケアの視点が見出された。

【キーワード】 多様性 精神障害 生き抜く 質的研究

1. はじめに

2022年、障害者権利条約批准に伴う建設的対話がジュネーブ、国連にて行われた。結果、日本の精神医療における強制入院、隔離・長期入院の現状に対して、国連から勧告が通達された（朝日新聞記事2022）。

決して、手を尽くしてこなかったわけではない。しかし、長期入院の現状は小さな変化にとどまり、近年では、神出病院や滝山病院にみるような精神科病院における虐待報道に至る現状がある。

イタリアは精神病院を撤廃し続けている国として紹介されるが、人類学者の松嶋(2014)は、バザーリアが「単なる脱病院化」ではなく、「脱制度化」としての「脱施設化」を行なったことを記している。また、森越（2022）はイタリアの精神病院閉鎖を推進していったバザーリアの思想を引き継ぎ、地域精神医療を実践していたメッツイーナへのインタビューを記す中で、「精神科病院を閉鎖せよという戦いをしてはいけない。（中略）「閉鎖せよ」は、一種の恐怖を与える表現です。人間の本質に立ち戻り、プロセスの中で変化が起きますから、まず良い治療共同体を時間をかけてつくる。そうすることで必ず変化が起こるのです。」という言葉

* 北海道大学大学院教育学研究院 臨床心理学講座（障害臨床心理学）
DOI：10.14943/b.edu.143.37

引き出している。

松田（2022）は、「臨床経験30年余を振り返ったとき、「精神障害者の方々は、本当に地域で暮らしやすくなったといえるのだろうか」と情けなくなってくる。」と綴っているが、地域精神保健福祉の社会資源として、制度が整っていくことに安住していたら本末転倒となるようなことが起こりかねない。だからこそ、今と未来のより良い実践に向かって、ともに歩み続けるために、筆者は、世界の中で突出した精神科病床数の多さを示す、北海道、札幌であるにもかかわらず、制度を超えた実践を切り開いてきた先達から学び直していきたいと思う。

2. インタビュー調査概要

2.1. インタビュー調査の目的

本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査を報告するものであり、本編は第5報となる（松田 2019, 2021a,b, 2022）。研究目的は、前述した引用文献に記した通りである。以下に再掲する。

第1の目的は「当事者が精神障害を抱えて生き抜くとはいかなることか」という問いに基づき、地域生活において精神障害を意識する（させられる）とはいかなることか、その生きられた経験の意味を探求することである。また第2の目的として、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、語られた物語から「多様性を認め」合うケアの視点を探求することにおいている。ケアの視点とは、教科書にあるような模範となる解答を記述するのではなく、ケアの担い手として応答せずにはいられない物語の発見である。

2.2. 研究方法と分析

2.2.1. データ収集法

データ収集法は、前述した引用文献で記された通りである。以下に引用する。

データ収集法はインタビュー調査とした。インタビュー方法は、文書にあるテーマと共に、「暮らしの中で、関わりの中で病気を意識する（させられるとき）、しないときについて、自由にお話をしていただきたい」と調査協力者に投げかけ、あとは、その場の流れ次第でインタビューが展開する非構造化面接である。今回インタビュー調査に応じてくださった美川さん（仮名）との面接は2回にわたって合計約2時間行われた。1回目は、上記の問いから始まるインタビューを行い、2回目は、1回目のインタビューの内容を読んでいただきながら内容を確認する作業において、インタビュアーが自発的に話し出す物語を聴きとる方法をとった。

新たに、本論文では、インタビューの中で、心がけていたインタビュー技法を書き記しておく。

それは、臨床における面接の基本となる傾聴のみならず、インタビュアーにとっての、今、ここでの気づきを言葉にして返す手法をとっていることである。その頻度は決して多くはない。肯定を期待するような、強要するような文脈にならないよう細心の注意を働かせ、言葉遣いや声の調子を意識しながらの応答である。同時に、インタビュー技法からは離れるが、言葉として発することのなかったインタビュアーの内なる声も、あとからデータとして書き起こした。

2.2.2. データ分析から結果記述まで—調査事例研究法—

データ分析は調査事例研究法を用いた。調査事例研究法とは、松田（2021b）による命名である。調査事例研究法の手続きについては、以下の通り。

臨床における事例研究法を用いたインタビューデータの分析手続きについては、松田（2021b）に、調査事例研究法におけるデータ分析から結果の記述手続きは、松田（2021a）に記されている。さらに、松田（2022）では、結果の記述方法と、インタビュー結果を物語として辿っていく際に留意したことが加筆されている。詳細は松田（2021a,b, 2022）に譲る。

2.3. インタビュー調査を依頼したフィールドについて¹

2018年にスタートしたインタビュー調査は、NPO法人精神障害者回復者クラブすみれ会（以下「すみれ」とする）が運営する地域活動支援センターを拠点として行った。松田は、調査実施に至る道のり（松田2019）、そして「すみれ」に関する歴史やフィールド紹介（松田2021a,b, 2022）を継続して報告している。本稿では、これらに引き続き、「すみれ」が辿ってきた対外的な動きについて知るところを記したい。

「すみれ」は福祉的な制度設計の乏しい精神衛生法の時代に生まれている。

黒子のごとく活動を支援する専門職や団体（北海道生活と健康を守る会連合会）こそ確かにあったものの、社会的に存在が保証される基盤などないままに活動は始まった。

当初「すみれ」は、財政基盤もなく、代表格の当事者が手弁当で一人で運営を担っていた。現理事長はその頃のことを知る一人だ。

現理事長が当時を振り返ったときに思い出されたのは、その頃の会の活動は、代表の方の持ち出しで、貯金をあてにして運営していたこと。けれど、貯金の切り崩しを代表の方の父親が認めていたのだという。代表の方は、「自分を支える手が何本あるかで違うのだ」と常々おっしゃっていたという。より身近な家族の理解がそこにはあったのだろう。現理事長がふと思い出したエピソードには、「すみれ」の活動に関心を持ち、一緒にやろうと声をかけてくる団体もあった。「健康にいいものを食べていれば病気も治る」と誘われたのだ。しかし、黒子の如く支援する専門職は、その時ばかりは「それは治療者の話だ。私たちは支援者なのだ」と突っぱねたという。

支援者として関わっていた専門職である当時の精神衛生センタースタッフは、「すみれ」に足を運び、常日頃から、利用する皆の意見を聞きながら運営することを助言していたという。そうこうするうちに徐々に、そのスタッフの足も遠のき、「すみれ共同作業所」が形作られていった。また、同時期、交渉を伴う制度の利用、年金や生活保護のことなど福祉的なサポートは、北海道生活と健康を守る会連合会とそこから派生して立ち上げられた精神障害者を支援する会がバックアップをしていた。

個人の頑張りのみならず、下支えする支援者や団体などとの「支える手」の結びあいがあったのだ。

とはいえ、共同作業所という存在は、しばらく、法外施設に位置付けられていた。つまり、制度を超えたところで「すみれ」は芽を出し、花を咲かせていた。今に至るまで発行し続けている「すみれ会便り」開始当初のバックナンバーを紐解くと、～から、～さんへという往復

¹ 本節は現理事長に内容確認する際、言添えた内容も加筆し、承諾の上、記している。

書簡のような形体で、各々の便りが編まれている。それはまるで、地を這い根をのばし、すみれの株を、仲間を増やそうとする営みの象徴のようである。

1980年後半に「すみれ」が協力したTBSの報道番組には、「人間らしく生きたい」というタイトルがつけられていた。取材を受けた横式氏は、「精神病院に入院したことがあるかどうかによってその人の人生は変わるって言われています。人間でないんだっていったん否定された。わたくしにとって、人間として扱われるだろうか、人間だと主張していいのだろうかというためらいを感じる。そういう私になったということは嫌です」と述べ、「病気の部分があっても冷静の部分の大きさをいけばちゃんと社会でやっていける」と明言していた。この番組には、本報告の調査協力者である美川（仮名）さんも登場している。

同年代、精神科デイケアに対する診療報酬が制定されていく中、精神障害者の社会復帰という課題が共有され、研修の場が札幌市内で開催されるようになっていた。この研修の場に「すみれ」の方々は参加されていて、（筆者にとってはとても）インパクトのある発言を全体に向けて発信されていた。当事者の存在が、より良い実践を重ねていく上で欠かせないということは、一目瞭然のこととして、筆者の脳裏に強烈に刻印された。

障害者運動のスローガンである“私たち抜きで私たちのことを決めないで”のもと、「すみれ」の方々は、生活者として切実な願いを叶えるべく、行政への交渉も実行していた。中でも精神障害者に対する交通費助成は大きな成果だ。運動を起こすとき、限定された場所の往復という狭い行動範囲を理由にその必要性を疑う発言に対して、「僕だってデパートに行きたい」と主張されたエピソードは印象深く残っている。催事場が大好きな方だったそうだ。

医師の協力を得て、「自分の薬を知る相談会」というタイトルで、セカンドオピニオンを企画してきたのも「すみれ」の対外的な活動だ。新型コロナウイルス感染症拡大もあり、今は開催されておらず、今や共同意思決定が提起される時代となった。ユーザーとしての知る権利は守られていくのだろうか、「すみれ」がセカンドオピニオンを企画する意義は薄れていくのだろうか、改めて尋ねてみたい。

少しだけ、時を過去に戻し、障害当事者が、国の障害者福祉計画を検討する委員会の構成員として呼ばれるようになる時代が到来した頃、「すみれ」の指導員を務めていた方もその一員として加わっていた。調査協力者である美川さんのご友人である作田（仮名）さんである。しかし、もう、作田さんは今、この世にいらっしゃらない。作田さんは、本報告になんと言葉を添えてくれるだろうか。

対外的な活動として、松田（2021a）は、「すみれ」に息づいていると感じられる、じぶんについて綴ること・語ること・主張することにかかる活動を紹介している。札幌市が主催した「心の健康まつり」への参加や札幌精神障害者回復者クラブ連合会主催「我らが主張大会」への企画・参加である。松田（2021）は、「すみれ」のなかに「今に息づく語ること・綴ることへの活動とその言葉たちは、表現せずにはいられずに溢れ出し、他の誰かに差し出されていた」と記している。

2007年、障害者自立支援法のもと、NPO法人として「すみれ」は、制度の中に組み込まれた。

障害者総合支援法下となった今、多くの就労支援事業所や相談支援事業所が開設され、「すみれ」の存在が埋もれて見えなくなってしまうこともある。春先いち早く、群生して咲くすみれは、ほのかな香りを漂わせ、春を待ち侘びてきた人のところを掴む存在だ。しかし、ほどなくして、より旺盛で背の高い草花に囲まれ埋もれてしまう。つい、今の「すみれ」の現状

と重ねて見てしまうことがある。

制度内に収まることで、社会的存在を盤石なものとしたように見える一方で、「すみれ」の魅力は貫き難くなっていきやすいかと危惧することもある。制度外の時代は、当事者同士の出会い、ひとと人のつながりを魅力にした「すみれ」であったが、制度化されるのに伴い、口づてではなく、事業所間のつながりに支援者が介在し、賃金や食事提供や送迎を陳列して人をもてなすサービス供給と消費による個人化が進んでいったことで、先に述べた「すみれ」の魅力は貫くことが難しくなったのであろうか。

一方、新型コロナウイルス感染症拡大のさなかにあって、何度か、活動休止を余儀なくされてもお、「すみれ」という組織は残っていくような様子が筆者の目からは窺える。季節は必ず巡りくる。

現理事長は、「すみれ」は制度の枠組みにはまらないとおっしゃる。

制度に定められたピア・サポーターはいないけれど、互いの助け合いはあたりまえに展開している。事業所の職員が指導や禁止の対象にするようなことも、ここでは日常の景色に収まっていく。ある利用者からは、パチンコの戦利品として、大袋に収まったお菓子たちが惜しげもなく差し出されたりする。

こうして、「すみれ」が展開してきた対外的な動きのいくつかを紹介していても、年月を重ねていきながら、やはり、たち現れては姿を消していった人たちの顔が浮かぶ。みな、筆者にとっては、畏敬と敬意の念を持って見上げてきた人たちである。「すみれ」の活動は、確実に社会に向けて大きな成果をもたらしてきたに違いない。でも、同時に、何か、社会との摩擦によって、すり減っていくものがあったのかもしれないとふと案じることもある。

本報告はそっと添えることで、存在の証をそのままに留めたい。

2.4. 美川さん（仮名）と私²の出会いから調査を依頼するまで

今回のインタビューに協力してくださった方は、美川さん（仮名）である。

美川さんはかつて「すみれ」が共同作業所であった頃、凛として指導員の仕事をされていた方だ。

最初の出会いとして思い出すのは、そろそろ私が「すみれ」に足を踏み入れた時に、さっと、まず先に、名刺を差し出してくださったことである。名刺交換の礼儀すらわきまえておらず、未熟者で、下っ端意識が抜けない私に対して、美川さんは「すみれ」の訪問者として、一社会人として、きちんと迎え、もてなしてくださった。その態度は、私をさらに緊張させたことを覚えている。とにかく、私のようなものにまで、きちんと応じてくださったと言う記憶は鮮明だった。

随分と前になるが、とある報道番組の取材では、実名でモザイク処理もなく、インタビューに応じる若かりし頃の美川さんも目に焼き付いている。そののち、私が、よりすみれに足を向けるようになった頃には、美川さんは指導員をお辞めになっていた。それでも近況を耳にすることはあり、すみれ会便りなどで、美川さんの文章を拝読することはあって、すみれに行くと、その姿をどこかで、いつも私は探していた。

私は、美川さんのことは詳しく存ぜぬままだった。それでも美川さんは、私のことを覚え

² この節以降、筆者の表記を「私」とする。

ていてくださり、久しぶりにすみれでお会いしたときには、いつも笑顔でご挨拶をしてくださっていた。一度、雑談がてら私の相談に乗ってくださったことがある。白内障手術をしようかどうかという話をしたときだった。美川さんはご自身の経験をさらりと教えて下さり、私に治療に向かう力と安心を与えてくださった。

私がすみれに行っても、なかなかお会いする機会を得ることが少なくなっていたけれど、聴きとり調査を始めるようになって、なんとか、いつかはご依頼申し上げたいと思いを募らせていた。その機会が、コロナ自粛生活が少しだけ緩んだある谷間の日によりやく訪れた。美川さんは、いつものように、ちょっとおしゃれなブラウスを着て、きちんとした身なりで、お化粧をされてすみれにいらっしゃっていた。チャンスとばかりにお願いをしたのは言うまでもない。そして、そののち、インタビューを約束した日も、いつもと変わらず、美川さんは笑顔で私をすみれで迎えてくださった。

3. インタビュー結果

インタビューの約束は、月に1回、「すみれ」で絵画サークルが開催される日に重なっていた。美川さんは、絵画サークルの常連さんだ。元々「すみれ」歴代の指導員だった人だけに、1回目のインタビューは、「すみれ」との出会いと歴史を自身の歴史と重ね、蓄積された記憶をたどり綴ってくださった。一方、2回目は、この大きな物語に潜在していた行間が雑談の勢いや問いかけによって埋められていくようでもありつつ、でも埋めきれないような、そんな印象を私に残すインタビューになった。おそらくは美川さんのせいでも私のせいでもない。口ごもり話しづらくされていたわけでもない。厳しいエピソードも微笑ましいエピソードもあった。喘息を抱えていらっしゃることもあって、間をおきながら、息を整え、ときにごほごほ短く咳き込みながらも、それでも辛そうなそぶりは一切見せず、ICレコーダーを切っただけから「先生、話しやすいわ」と、お喋りを続けてくださるお姿を前に、ただただ私は惹き込まれながら感謝するばかりだった。とにかく、まずは、それをそのまま、ここに届けたいと思う。

以下、まとまった分析データの引用は前後に1行空けて示す。また、文中の私の発言は〈 〉、美川さんの発言は「 」, 発言中に引用される他者の発言は『 』, 発話の最中の聴き手の短い相槌や様子などは()で表記する。

3.1. 預かり知らぬ発病による入院で「すみれ」と出会う

「私が最初にすみれ会っていうのを知ったのはね」と話し始める美川さんは、今から40年ぐらい前に入院していたとき、34歳、同じ部屋で保健師をしていた人が、教えてくれたことにはじまった。「じゃあ、ちょっと行ってみようかって」、週1回通うようになった。毎週木曜日、歌声サークルでギターに合わせて歌って、豚汁とか昼ごはん食べていた。

美川さんは、当時の面々を思い浮かべ、年賀状のやりとりがある人となればその近況までも教えて下さった。

発病は息子さんが幼稚園のとき。

「何で入院したかわからなくなくて(うんうん)、気がついたら、..、ベッドの上だったん

ですよね。(ふうんん) うふふふふふ。」

〈うんうん, そうーだった,...。〉

「で, 相当なんかー, うー悪かったらしいんだけど, なかなか先生が(うん), 主人の話ではね。(うん) あの一,, もういいんでないかって, 退院させてくれって言っても, なかなか退院させてくれなかったらしいんですよね。(あーはあんうーん) ほんで, 半年ぐらい入院してたのかな。うん。」

嫁ぎ先のおばあちゃんと同じくする2世代家族の主婦だった美川さん。「自分が精神障害者だっていうこと, そこは, 病院の時は思わなかった」。「すみれ」につながっていくときにも, 記憶に残る誘い言葉があった訳ではなかった。

このとき, 「すみれ」に行こうかなと思える美川さんの心の動きを, 汲み取り損ねてしまった私は, 以下のように問いかけていた。

〈あーーうーん, したら, なんか, 行かなくてもいいって思いそうな, ふうに, 私, 思っちゃう。今, (うん) 思っちゃったんですけど。行こうかなって思えたのは何か,, あれですか。。。。〉

「うーん, そういう友達とかね。(あつ) うん, そういう,, 障害を持ってる人は, どんな人なのかなーっ, なんて興味もあったし。」

継いで, 「すみれ」の会長さんや中心になっていた人たちが「親切に, 声かけてくれて, そういうことで」と話は続き, 「すみれ」がテレビ番組の取材に応じたときのエピソードに話題が移った。

3.2. 人間ではないような感じになっちゃったのかな…

「すみれ」は1980年後半に「人間らしく生きたい」というタイトルがつけられたTBSの報道番組取材に協力している。のちに政治家となった堂本暁子氏のインタビューに, 美川さんは「主婦ってことで, 実名でモザイクもかけず正面を向いて取材に応じた。その番組を見ていた息子さんの同級生のお母さんがいて, 学校の「役員やってみたら」と声をかけられた。「よく解釈してくれましたね。うん。おかしいとかっていうことではなくて」と, 今でも行き来のある同級生であることも添えた。ご主人は出演にはあまり賛成ではなかった。けれど, 美川さんは「日常の家事のことは, 全部わかる, できた」し, 入院とて「ベッドにいて, そして, 薬飲んで, ご飯食べてって,, , いうぐらいのことしかないもん」だった。私が〈人との出会いを求めておられてって〉と返してみると美川さんは, 「そうそうそうそう」とうなづいた。

「まだ, そのときは精神障害者っていう人が, まー本当, 気違いとか馬鹿だと(うん) 思われてて(うーん), 人間ではないような感じがしてた, (うーん) 時代だから(うーん), 私も, そこになっちゃったのかなって思ってたね。」

私は少し色気を出し, ここについてももう少し話を引き出したいくらいあれこれ問いかけた。しかし美川さんは「そんなには, 思い込まなかったんですけど, そんな時, 前田(仮名・前理

事長)さんもいたし(はいはい), うーん, だから,, 現田(仮名・現理事長)さんもいたし,,」。バリバリやってて, 「みんなも元気にやってるなと思いましたね」。「意外とね,, , むふふふ(そうかそうか,, , ふふふ) はい, だから, 特殊な人ではないなーって」, 当時のメンバーがバンドを組んで活動していたり, 1人200円出し合って近所のスーパーに買い出しをして, 「白菜とベーコンのスープ作ったりとか」した話を始め, 最後に「うーんだから, (うーん) そんなに, 恥ずか,, (うん) 精神障害者になったからって, そう, 恥ずかしいってことは(うん) なかったんですよね。」と締めくくった。

私は, 美川さんの紡ぐ言葉をそのまま返しているうちに, 身体の中に沸き起こるさまざまな思いが生じてきていたのだが, どうしても言葉にしきれず(あーなかなか, まだ, 言葉になりきれないけど,, ,), (美川さんは, 美川さんのままで, って(うふふふふふふふふふ) って,, , っていうか,,)と返すのが精一杯なまま, 話は進んでいた。

のちにこのくだりを一緒に読んだとき, 美川さんはふっと「ここにくると, ほっとしますよね。うん。」と呟き, 「みんな仲間って,, , いうのがあるから, 一つの病気, いろいろ病気, もってるけど, 病気同士で」と添えた。

3.3. 障害持ってる人はどんな人が興味があった

3.3.1. 自分がどうなっている(いた)のかつかもうとする

1回目のインタビューで尋ねそこねた美川さんのおっしゃる「興味」を, 私は, 2回目インタビューでもう一度聴くことにした。

「だんだん,, (うーん) 病識っていうのが,, (うん) 出て,, きましたね(うーん)。うん, (うん) ああ, やっぱり私は病気だったんだなってふうに, (うん) 思うようになりましたね。(うーーん) あのーーー, クリニックの先生³(あー, はいはい), そこに行くと, (はい) かなりよかったんだけど。」

他者への関心として「興味」の中身が出てくると予想していた私は, この話の流れについていくために慌てて頭を切り替えた。

美川さんには入院初期の記憶がない。強い薬, 点滴をしたらしく, わからなくなっていた。最初の診断は心因反応だったけれど, 二つ目の病院で統合失調症に変わった。主治医に「どうしてですかあって聞いたこともある」。けれど, 「なーんて答えられたか,, ,」, 記憶は判然としない。一方で, クリニックの先生とは, 「ずっと先生と話してて, いろいろ, 家のこととか, 主人のこととか, (あー) いろんなこと話して」, 「やっぱり病気なんだなってふうに」思った。クリニックの先生は, 「悩みをね」聞いてくださる先生だった。そして, ご主人があとから美川さんに話したエピソードが続いた。

「主人が言うにはね, どこにも行かないようにって思って, 手縛って寝たんだって, (いあっはっは) そったらね, (うん) いつの間にかいなくなって, 探したらね(はい), あの一, 友達にね(うん), あの一, 会計やっていた人がいるんです(はい), 前にね。(はいはい)

³ 「すみれ」にはこの医師を主治医とする人が何人かいる

その人にね（うん）、あの一、お金一、貸してくださいって言って（うん）、タクシーでね（はい）行ったって、..、いう（一緒に笑う、あっはっはっは）。。。」

美川さんは「そんなことあったのかなあって」、「何を考えてたんだかああ」と笑いながら話し、「病気がなせる技だったんだなってことさ」と結んだ。続きは、病気になった頃、コンビニでアルバイトしていたときの失敗談（私にはそれがダメだったというほどではないようにも思えたけれど）。

そこでは、「私が悪かったんだなあ、って思って」、「考え込んで、行けなくなっちゃったっていうのがあるから、..」、「やっぱり、失敗を恐れるっていうのかな、そういうの、..（うん）責任感がつよすぎるっていうか」、あったかもしれないと振り返った。

3.3.2. 自身への責任のあらわれ？

私はこのときようやく、最初にあった障害持っている人への「興味」というのは、回り回って美川さん自身に向かっているのかもしれないという連想が湧いた。

〈あーん、..、あー。興味っていうのは、..、責任感、（うん）ちゃんと知ってなきゃいけない、みたいな、..〉

「そうそうそう（あっそうー）それなのにー、何もできないなんて、まあっ、そうねえ、うどん作ったり（あー）、お蕎麦作ったりとかねえ（はい）、レジ打ったりとか（はい）、して、品物並べたりとか（はい）、いろいろしますよね。で（はい）、そういうの、わかん..、（うん）そういうのは、買う方は、..、そういうのは、..、売の方はわかんなかったから、（はい）お客さん、まず大事にして、..（はい）って、言われて（はい）、店長に言われてね、..」

ずっとコンビニ仕事の経験話を話してくださっていたのだけれど、私は、美川さんが発病時に自分がどうなっていたのか知らなかっただけに、自分に対して、あとからでも知ろうとする責任を持とうとしていたのかもしれない。そんな連想を働かせながら、私はこのとき応答を重ねていた。

〈もともと、何か、その、..、お、..、精神疾患の方とのお付き合いがあって（うん）、とかって、そういう話かなーっなんて、勝手に想像していたんですけど、（うん）ぜんっぜん、違っていました。。。ああ、そういうことでしたかー。〉

「そうですねー。やっぱり、正常人の一、奥さんって、..、奥さんって、..、うちの息子とおなじくらいの、奥さんが（うん）、午前中で、私は、午後1時から5時までだったんですね。」

〈あーコンビニの、..〉

「パートのね（うんうん）、コンビニのね（うん）。。。。で、よく、話したりして、..、（えー）一般の人と（はい）、お友達になれたしね。（はい、..、はい）うん。（あーそうかああ）だから、接客っていうのは、ぜんぜん、知らなかったから、..、（うんうん、はいはい）ああ、こうやっ、なきゃなんないだなあって、とか、非常に大変だったから（うん）、パニッ

てしまったっていうんだよね,,,(そう,,,) いやああ, なんて,, 死んだのかなああって,, , , , ね, 結婚してねー, (素敵な方で,,) 仲睦まじくー (睦まじくねー) してたのにー
ね,, , どうして,, , だったんだろうって(うん), わかんないんですよね, 原因がね。。。」
〈わからない,, , , 〉

「その人の一,, 気持ちになんないとね(わからない,,), わかんないですよ。」

「今のすみれの土台を作った人たちは, すでに亡くなっている方が他にもいる。けれども, とびきり作田さんの名前は, 美川さんにインタビューをお願いした時にも, 真っ先に出てきた名前だった。

3.5. 閉じることとひらくことをめぐる思い

作田さんのことを思い浮かべながら, 〈死んじゃいたくなる, 病気なのかなあ, って,, , 〉と私が呟くと, 美川さんは「私も, 死にたい, 死にたいって言ってたなあーって」, いろいろな手段を真剣に考えていたことを漏らした。美川さんにとっての鬼門は春先だ。

「季節の変わり目はね, あの,, 春先がよくないんだなー私ね。(うん, うんうん) もう,, 冬はねー, 割と落ち着いているんですよね(うん), 雪で, こうー, (うん) そいて, 窓が, あったかくなっきて, みんな, 窓が,, 開けたりなんかすると, こう,, , (ばああーっ とね) お話ししてるじゃないですか,, , 」

〈ああ, 声, 聞こえる。〉

「そうすると, 声聞こえると(うん), なんか, 私の悪口言ってんじゃないかとかさ(あーー), そんなこと思うのね,, , そんなことないのにね。」

「なんかね, 自分が見られているんじゃないかっていう」, 「オーバー脱いでいくとね, そういう感じになるんですよね。気持ちに,, , 」という表現はたしかに, 頭になる怖さとしてフィットする感覚だった。〈守られている感じしますね。。。 (うん) 覆いかぶさってね〉と継いでいくと, 「(雪が) 溶けるとさ, 今度, 草取りしなきゃいけない,, , 」, 「畑するなら, どうやったらいいか」, 「どこに, 何を植えたらいいか」, 「いろいろとね, 考えなきゃいけない,, , 」, 「それが悩みになって」, 毎年, 思いたくないんだけど思ってしまう。

〈頭, 忙しくなりますね(そう)。うん, したら, なんか(頭から手を広げて, 身振りを入れて) 飛び出しそう。〉と言って一緒に笑い合うなかで, 心底, 私は美川さんが生きていてくださってよかったと思い, それを言葉にして伝えた。

美川さんは, 「生き抜いてきましたよー。もう, 74年なんだから」と微笑んだ。学童期はひとクラス60人に詰め込まれた団塊の世代。お父さん(ご主人)とアメリカに行ったし, ヨーロッパにも行ったし, 思い残すことはないねーと言いながら, コロナでキャンセルになっちゃったけど, 「もう1回豪華客船に乗りたいねー」ってむふむふにこにこしていた。

同時に, 〈生き抜くコツは?〉と問うと, 「もう, 自然体ですよ」, 「何事もなるようにしかないなあ」と, おしゃれを楽しんだり, お化粧したり, 朝起きたら, 仏さんに水をあげて, 線香あげて, お経あげて, 植木に水をやってね, と続いた。

3.6. 嫁ぎ先と実家で重ねられた歴史

3.6.1. そんなに苦労はなかったんですけど…

主婦でありつつ外で仕事をするものの苦労を尋ねると、美川さんは「そんなに苦労はなかったんですけど…」とあっさりしたものだった。息子さんは、「おばあちゃんに育てられたもののようなんで」と、とはいえ、1回、2回と話を聞いていくほどに、私には美川さんの苦労話と家族への思いは深く感じられた。

息子さんが生まれて36日目に美川さんの実母が急にお亡くなりになった。その後、実家に残っている実父と弟さんが合わなくて、1年後には別居となり、家財道具の後片付け全ての仕事が美川さんに降りかかった。苦労、といえば「それはちょっと大変で」という話で、私が家財道具の後片付けの協力先へと一度話題を広げてしまってもなお、大変だった昔語りは続いた。

3.6.2. 精神的に疲れる

「普通の主婦でしたからね」という美川さんは、子育てをしながら、在宅で中学生の赤ペン先生（通信制の学習サポート）という添削指導の仕事を3、4年していた。1枚で百円、1週間に一度の出勤時には、ご主人やおばあちゃんが息子さんをビルの近くで遊ばせたりしていた。

バリバリ働く美川さんという印象を強く持っていた私は、この添削仕事の話から、病気の原因に話題が移行するのをこのとき予想していなかった。

「原因がやっぱりあるんですよね」。赤ペン先生の試験に落ちたことのあとに口にしたのは、実家の父親が「てんかんがあって、もう働けなくなって」病院に入れたこともあって「疲れたんでしょうね、精神的に」、「それでー、、、私自身も具合悪くなっちゃったんですよね。」

父親は（美川さんと）同じ病院で、亡くなっている。

「父が一、やっぱり、孫が可愛いから1週間に一度、来るわけでしょう、そうすると、あのおばあちゃんがね、また、来たって感じでさ、やっぱり、..、そういうのね」と呟いた。

実家と嫁ぎ先の間で生じた軋みにさらされていたのか、と受けとめていると、一旦はここで話題は次に移っていった。しかし、2回目のインタビューでは、さらにこの辺りの苦労の深さを私は知ることになった。

3.6.3. 実母の死去・実父の病気・就労・結婚・2世代同居・弟の世話・出産・流産・子育て

美川さんの母親は52歳で急に亡くなっている。いろいろ大変で「精神病になったのもあるだろうし」、父親がてんかんで「遺伝的なものもあったと思うんですよね」。そう綴り始めた美川さんだったが、尋ねていくと、美川さんが大学に在籍している頃は、父親は働いておられたし、「裕福で」、のちに一部上場に上がった安定企業に就職して職場結婚して出産するまでは、お金も貯めていた。

父親が「働くのはもう無理」と言われるのはその後、おそらく美川さんが結婚したあとのことのようにだった。美川さん夫婦は結婚当初、おばあちゃん（義理の母）と別居をしていた。けれども、一人暮らしになったおばあちゃんが、好きなお酒を外で飲んだある日、オーバーを着たまま玄関で寝てたことがあって、それじゃダメだからって、結婚して半年ぐらいで同居が始まった。初めは社宅暮らし。その後、子どもが生まれるからと、現在の建売一軒家に引っ越した。

出産手当が出る6ヶ月までは働いて、そのあと出産した病院の先生は「いい先生だったの」、と話しだしたのは訳があった。

「1回入院して、4回、入院してんだけど、1回目して、、、ずっと、、、だめ、、これ以上は、やっても、、、子ども、、、ダメだっていうんで、(ふうん) 2回目は、(ふうん) 元気だった、元気な子だったんですね。(あー) あの一、吐き気とか、って、減ってたから、ああ、、この子は、大丈夫だなーって(あーそうー) 思って、今の、息子なんだけど。むふ。(あーそういうのがあって) で、4回目、5回目も、(あ、、) 流産しちゃって、(あ、、それは辛い、、) んん、女の子が欲しかったんだけど(んんん)、掻爬、掻爬してるもんだから、もう、嫌になっちゃってー(んんん) うん。(んん) もう、私には、ひと、、もう、男の子がいれば、いいから、って主人も言うし(うーん)、跡継ぎいるから、、(うーん) もう、(あーそう) やめようって言うことになって。」

かけがえのない命が途絶えていく流産が繰り返されることにかかる心身の負担はいかばかりか。そして「この子は大丈夫だなー」と無事に生まれてきてくれた息子さんへの思いの深さに私は深く感じ入った。

〈大切に、、お育てになったんですね〉と私が返していくなかで、美川さんは、最初に精神科に入院していたときの息子さんのエピソードを話して下さった。

「でね、最初の病院に入院してるときもね、(うん) 幼稚園の時だったんだけど(はい)、息子が自転車で、ね、おばあちゃんが漬けた漬物持ってきてくれたの。」

「で、、おばあちゃん、髪が白いでしょ(はい)。そしたら、、、あの一、か、、髪の黒い人がいいって、、んんっふっふっふ(あっはっは)。幼稚園の運動会とか、いろいろあるわけでしょ(はい)、お遊戯会とかね、、(うん) そういうの、おばあちゃん、白いから、」

〈若い、、お母さんで黒いから、、〉

「若い、、んんでね。黒い、お母さんがいいって、、んふふふふ(そういううう)。いやあ、息子には悪かったなあって、って思ってますね。。。」

美川さんは今、ご主人と二人暮らし。電気工事士で新しもの好きのご主人は、トイレや玄関の人感センサー設置も軽々とこなす。草刈りも全部してくれたらいいのに、「畑だけして、他、ほうほう」と愚痴りながらも、2人で生きてきた。

美川さんは、昔を振り返りながら「なんでも背追い込んじゃったんだね、それで疲れちゃったんだわ、、要は、そうなんだよね(うん)。おじいちゃんのこととかね。弟のことだとかねー」と言葉を重ねた。

一家の「大黒柱」は母親だっただけに、「いなくなって、、崩壊しちゃうのかねー」と美川さんは呟いた。弟さんは、16年前に肺気腫でお亡くなりになっている。東京に就職したときには月8万の仕送りを美川さんがしていた。同時に父親のアパートに行っては、掃除して洗濯したりもして、美川さんは当時二つの家族を背負っていた。

美川さんの苦労の深さに圧倒され、〈いやああ、今聞いただけでも、いっぱいですわ（うん）、肩、いっぱい。。。〉（そうですね）はああ、そうですか、そんなふうに。そりゃあ、どこかで休まんきゃいけんかったですよ。〉としか私は返す言葉が浮かばなくなった。

そのあと美川さんの話は、重ねてきた歴史の終着点を示すかのように弔いの話題になった。美川さんの実家と自身の家の合葬を息子さんは考えている。「いい息子に育った。。。」というときの美川さんは愛しみに満ちていた。実家の母親が遺した着物を葬るとき、たくさん出して業者は持っていかず、いいものだけを選んで100円、200円で持っていかれ〈悲しいよ〉としんみりもした。父親の三回忌と母親の13回忌といった実家の法事も美川さんが取り仕切った。ご主人はもちろん手伝ってくださるし、断捨離にも協力している。

3.7. 「すみれ」の指導員という定職につくまで

話は過去と現在を行ったり来たりしていたけれど、美川さんは発病前後の物語からふっと区切りをつけるように、「すみれ第二」で指導員を10年くらい続けていたこととミシンサークルの話に戻った。ミシンの先生には、売り物にする製品制作のほか、スカートやスーツやワイシャツやワンピースや、週1回は自分の服が作れるように教えてもらったのが楽しかった。

美川さんはこの頃を思い返すたびに、楽しげに私にこの話をしてくださった。

一方で、「すみれ」の指導員という定職につくまでは、3ヶ月ぐらいコンビニでパートをしたり、チラシ配りをしたり、「仕事、仕事やって、（うん）具合悪くなってそれで入院とか、」で、最初の病院に2回、そのあと別の病院で2回ぐらい入院をした。「黙ってうちにいると、なんか、かえって、」で、仕事を探していた。もともと、結婚する前は、大学を卒業して、教職をとっていたけれど採用枠もなく、民間企業に勤めて、経理の担当として、お茶汲みからテレックスとかタイプライターとか、小切手切ったりとかしていて、辞める、辞めると言いながら、3年勤続の間に、社員を動かせるようにまどなった。私が〈大変な、〉という前に、「結構、楽しかったですよ」と笑い返せるのが美川さんだった。

3.8. 一生懸命生きてきたなあと思う

実家を背負ってきた美川さんの姿と「すみれ」で指導員を務めてきた美川さんが私の中で重なり、つながっているように感じられ、それをそのままに言葉に返した。すると、美川さんは、しみじみと「なんか、結構、いろいろ、忙しく、過ごしてきましたね。今、一番のんびりしています。むふふふふふふふ」と言葉をつないだ。〈ご苦労様でした〉と労う私にさらに美川さんは、「一生懸命生きてきたなあと思いますね」と言い添えた。

「んんーなんか、一所懸命やろうという感じはありますね（あー）。何事に対して。うん。」

〈うーん、そうかあ、で、一生懸命やれば、あの一、なんていうか、〉

「返ってきますよね。」

このとき、この言葉が返ってきたのはなんだか私にはとても新鮮だった。

「返って」きたエピソードということだったのか、続けて「嬉しい話があつてね」と、美川さんは病院デイケアで一所懸命やってきた書道が4級から3級になって、「本にも出て、嬉しい

ねつつて」、お父さんと一杯やった話が出てきた。もちろん息子さんからLINEでお祝いが届いている。この話題は、ほかでも話題になった。さらに「なんか、じっとしてると、もったいないっていう、（はい）時間をもったいないって感じが（はい、はい）するんだね」と言っていて、今はタブレットでアンケートに答えると2問で1円になるサイトをご主人の分と合わせて利用している。

〈のんびりしているって言うけど、決して何もしていないわけじゃないっていうのが、今、よくわかりました。。。〉と笑いながら伝えると、美川さんはゴボゴボ咳き込みながら、笑い返して、「好奇心はね、旺盛なんだわ。むふふふふふ」とまた咳き込んだ。

「そうねー。うちの主人も、（うん）いやああああ、どうして、離婚しなかったのってたら（えっへ）、自分で、ちゃんと稼げて、生活できるようになるまでは、ね（うん）。駄目だと思ったからつつて。んんふふふふ（咳き込む）。」

〈あああー（ごほごほ）美川さんがあ。〉

「自分もね、主人も悪いところがあったから（あー）、こうなったんだろう、とも、いうふうに、いったから、」

〈お父さんが、言うてるのー〉

「だから、理解してくれるから、よかったなと思って、」

一生懸命生きられるそのベースには、変わらないご主人の理解がある。

2年前から、酸素が離せなくなるほどの喘息を美川さんは患っていて、インタビューが続くにつれて咳き込むことが多くなった。それでも、美川さんは、ご主人の理解について、入院するかしないかというときも、「ばあつとよくなるもんねっていうんだよね。（ほお）あつて気がついたら、（はい）入院するっていう、決めた途端に、よくなったもんね」、「今年も危なかったねー」とか、「7月過ぎればよくなるとつつてたら、良くなった」とか、「僕が、怒るって時は、あんたが調子の悪い時だよ」といった具合に、2人で積み重ねてきた確かな経験が連なり続けていた。

診断名は、統合失調症だけれど、「いろんなもの抱え込みすぎるのかも知れない」。それでいて「（大変さは）見せないように一、してる」。私が〈夫婦での乗り越え方みたいなのがあるみたいですね〉と返すと、「普通の人と変わらない」、「病気病気で思わない方がいいですよね」、「みんな（病気の人）は優しい」し、「一病息災」はほんとだと応じた。

「すみれ」での当事者運動や体験発表をご主人はどう理解されていたのかも知りたくなり問いかけたけれど、「あんまりないねー、そういうことは」とのこと。むしろ「すみれ」で一緒に仕事をした作田さんからの率直な感想を美川さんは思い出した。

同居していたおばあちゃんは、晩年、認知症になり、専門病院に連れて行ったり、検査場面に同席したり、内科行ったり、入れ歯洗ったり生活全般の介助を美川さんが全部こなしていた。それでも、ショートステイを利用してご主人と函館旅行に行った話や、おばあちゃん認知症になっても計算はできる人だったという挿話があり、家族3人で一緒に外に飲みに行ったりもしていた。今年はおばあちゃんの7回忌。13回忌まではやりたい。ご主人は肺がんの闘病中で、治療薬は全身にかゆい湿疹ができる副作用をもつ。「元気なんですけどね」と返す美川さんはさすがだ。率直にこの気持ちを伝えると、今度の誕生日で「74になるんですよ

(うんー)。70まで生きたんだから、(はい) こん,, 死ぬまで楽しもうと思ってる。うふふふふふふ」。と美川さんは笑った。

3.9. 責任じゃなくて自然体で生きていけばいい

2回目のインタビューでは、「障害もっている人はどんな人が興味があった」と美川さんが最初に話していたことの意味を、私は自身に対する責任の取り方のように思い至ったと伝えてみると、美川さんはそれをはっきりと否定した。

「責任,, 責任の取り方って,,, そんなに、責任が,,,,,, 負ってるものでもないなー、普通、自然,, (あ,, はい) 自然,, だねー。」
 〈あああ、そっか、自然体でしたねー (うん)。ああ,, そっか。。。。〉

1回目のインタビューでも出てきた「自然体」だった。

無理をすると「病気になっちゃう」。そして、調子が悪くなるとパソコンやっても間違いばかりになるのをご主人は「さっと,, 教えてくれる」。余命5年と言われているご主人が「いなくなったら、ほんと、困るなあああー、むふふふふ」と美川さんは微笑む。

〈そうか、旦那さんね。〉
 「うん。旦那さんの関わりっていいですよ。」

2回目のインタビューのとき、美川さんはその一言を添えて、静かに紙面に目を落とした。

3.10. にじみだす感謝と互いの心遣い

認知症だったおばあちゃんのことは2回目のインタビューでも思い出し、「おかしなこと言ってなかったんだよね」と、衰えたと感じつつも今まで通りの暮らしを穏やかに共に過ごしてきたことを綴られた。おばあちゃんとは食べ物が一緒に、酢の物がダメなご主人を横に置き、酢豚とか「美味しいねって」食べた。おばあちゃんの弔いも、7年経った今でも「なんか、昨日のよう」に思い出されていた。

生活には困らない年金を受給していたおばあちゃんの金銭管理に関しては、「迂闊」なエピソードもあったけれど、もう笑い話として美川さんは納めていた。私は、ご主人の助言に感心しきりだった。ご主人は公平な目を持った人で、「おばあちゃんと一緒に生活できる人」と思って美川さんと結婚したとのこと。今は、現状維持で肺がん療養中のご主人にLINEの使い方を手取り足取り教えてもらい、IFと2Fで「ご飯だよー」、「今行こー」って、音声でやりとりする、それが夫婦の日常だ。

3.11. 病気って思わないで普通の人と変わらない

一生懸命生きてきた、大変さを見せないようにしている美川さんにとって、病気や障害を意識することや、意識させられる局面はあったのか、私は問いかけた。

「あ,, ありましたけど、(うん)あの一ー、普通の人とそんなに変わらない,, で、(はい)

できるってことは、(はい) まー、自信がありますよね。うん。」

「東京行ったりね,, (はい) 長崎行ったりねえー (はい), それから, 沖縄に行ったりとか,, (はい,, うん) 全部, (うん) 行って, 障害者の人も, ね,, 重い人もいるし (うん), 軽い人もいるし (うん), いろいろ, (うん) みてきましたからね (はい, はい)。だから, あんまり病気病気になるいうふうに思わないで (そうですね), ね, (ね) きましたね。 (うん, うん) 体験発表とか, ずっとやってきましたからね。」

社会への反発という気負いを美川さんは否定した。そうではなくて, 「だから精神障害者も普通の人と同じだっていうふうに (うん) 考えて,, ,」体験発表をしてきた。

録音を切ったあとのこぼれ話では, 2-3年前に, 椎間板ヘルニアの手術をしたとき, 整形外科医に, 精神病だから暴れるんじゃないかって, 言われたけど, 手術終わった後に, お手製のパウダーアートと花束をお礼にさしあげたら, 医者が, こんなこともできるんですねーって驚いていた話をした。

一生懸命やってきたけど, 「もう60, 70になると, そんなにもうできないから」と言いながら, 「いやあ, やっぱり, 人生, 楽しく生きないと。(ああ) うん。つまらないもんね (はあ, はい,, ,), ねえ (はい)。病気だ病気だって言っても,, , (はい, はい) ねえ, そう思いますよ。」

達観されているかのようにも感じた私は, 目の前に〈しゅーんとした人が, もしね, ここにいたとしたら, (うん) なんて言ってあげられますかねええ〉と尋ねた。すると, 美川さんは「んん, あんまりー, 思いつめないで, 元気に,, , 何か楽しいことー考えたらーどう? って感じで,, , 自分の好きなことやったらーつつって,, , うん。」, 「みんなも困ってるけど, そういうふうに, いろいろ乗り越えているから (うん),,, , 少し元気出せばーって感じで, んふふふふ」と優しい口調で応えられた。

インタビューを終える間際に, 美川さんはもう一度ご主人への感謝を口にした。そして, 「自然体で生きていけばー,, , いいんだから」と結び, インタビュー協力も「みんながねー, 元気になるように。」という気持ちを示し, あわせて私をも励まして下さった。

最後に手渡しされた美川さん手製のパウダーアート作品は, 秋の気配を漂わせながらどっしり構える富士山だった。

4. 考察

4.1. 私が伺った美川さんの物語をたどる

美川さんは40年ほど前, 入院中に同じ患者仲間から「すみれ」のことを教えてもらい, 退院と共に利用を始めていた。息子さんはまだ小さく, 幼稚園の時だった。当初, なんで入院したかわからず, 自分が病気だとも思わなかったという美川さんだったが, 「障害を持ってる人は, どんな人なのかなーっ」という「興味」があって利用を始めていた。テレビ番組の取材が来た時には, 利用者の1人として主婦ってことで実名で取材も受けていた。当時はデイケアもないし, 地域資源もないなかで, 「すみれ」は唯一, 美川さんにとって親切に声をかけてくれる場だった。そして, テレビ番組出演は, 「おかしいとかっていうことではなく」受けとめ

る人がいることの気づきになってもいた。

「すみれ」での人との出会いは、「人間ではないような感じになっちゃったのかな」という思いを払拭するにあまりある場として美川さんに染みていったことが、当時の活動の回想を伺うにつけ、ふと口をついて出てきた「ここにくると、ほっとしますよね。」という言葉聞くにつけ、聞き手の私にも染み入ってきた。

私が「興味」について尋ねると、美川さんはご自身が「病識」を持つまでのことを綴られた。診断は心因反応から統合失調症に変わっていた。けれど、病気の知識が増えることが美川さんにとっての「病識」ではなかった。家庭のことやいろんなことを話して「悩み」を聞いてくださる先生との語らいが「やっぱり病気なんだな」に着地していた。ご主人がご自身の手と美川さんの手を縛って繋がって寝ていても、それを解いてタクシーで外に出て行ってしまったことは美川さんの記憶にはない。後から聞かされて、「何を考えてたんだかああ」と、今なら笑って話せる「病気がなせる技」だ。

コンビニバイトの失敗談は記憶にあるエピソードとして「私が悪かった」、「責任感が強すぎるっていうか」と省みる言葉に繋がった。少なくとも、「興味」は他者に向いているように感じて私は、自分がどうなっている（いた）のかつかもうとする物語が「病識」をも指しているように思えてきた。他者への「興味」という最初の自身の思い込みを修正しながら聴いていた私は、〈自分に対しても好奇心があるっていうか〉と伝えた時に美川さんが微笑んでくださったことに安堵し、自然と〈だから「すみれ」だったんですね〉と、言葉を継いでいた。

他の社会資源が乏しい中で、「すみれ」はつながりを生かし、活動を広げ楽しみながら、地域で一番大きい組織になった。そのとき、一緒に行動を共にしてきたのが作田さんだった。ミシンサークルでも当事者運動の決起集会でも、体験発表でも一緒だった。「わたしたち精神障害者ももっと頑張らなくちゃ」と言っていたその作田さんは、その後、突然この世からいなくなってしまった。溺れてお亡くなりになった作田さん。今でも美川さんの中では、「惜しい人を亡くしちゃった」と言いつつ、無責任な原因追求などすることなく、気の合う仲間としての記憶をまず先に甦らせていた。

美川さんも「死にたい」って言っていたことがある。そして、窓が開かれ話し声が聞こえてくるような気配漂う春は鬼門だ。冬は扉を閉じたままでいられるが、春は全てが開かれるゆえに「自分が見られているんじゃないか」「悪口言ってんじゃないか」と思ってしまうのだ。さらに、春の訪れとともに畑や草花の手入れのことを考えなきゃならなくなって、毎年思いたくないのに悩みになっていく。北海道の春、とりわけ雪解けからの変化をダイナミックに感じていた私は、顕になっていく怖さが実感としてもあり、思わず頭から手を広げる身振りを交えて〈飛び出しそう〉と言って一緒に笑い合った。そして、心から美川さんが生きていてくださってよかったと思ったことを伝えた。

「生き抜いてきましたよー」という美川さんに、私が生き抜くコツを尋ねると「自然体」という言葉が美川さんから返ってきた。

美川さんは嫁いであら実家との間で多くの苦勞をしていた。いや、美川さん自身は「そんなに苦勞はなかったんですけど」とおっしゃるのだけれど、やはり、聞けば聞くほどに苦勞話として深く私には感じられた。つらなる出来事は、まさに精神的に削られていくに違いないことばかりだった。

実母の急死、実父の病気と看取り、就労、結婚、2世代同居、弟の世話、出産、流産、子育て、実家と嫁ぎ先との間で生じる軋み、美川さんが最初に精神科に入院したときに残された息子さんの言動。さまざまなライフイベントを背負い、もろもろエピソードが詰め込まれ語られているにも関わらず、なおそこに、行間が存在し、言葉になりきれない、計り知れぬ思いがいっぱい詰まっているように私には感じられた。

美川さんは、「すみれ」の指導員につき、10年ほど務めた。ミシンサークルのことを話すときは、とても楽しげに私には感じられた。「すみれ」の指導員を務める前は、コンビニでのパートなどをして、具合悪くなり入院を4回ほどしていた。結婚する前も、辞める辞めると言いながら民間企業に勤め、社員を動かすまでの務めを果たしていた美川さんは、「結構、楽しかったですよ」と笑い返す。

ここまでを振り返りながら、忙しく過ごしてきて、「今、一番のんびりしています」、「一生懸命生きてきたなあと思いますね」と美川さんはしみじみとした。一生懸命生きてきた証に、最近の嬉しい出来事として書道の上達がある。喘息持ちの美川さんは、今が一番のんびりしていると言いつつも、じっとしているともったいない感じがして、と、日々楽しんでいること、衰えぬ好奇心をゴボゴボ咳き込みながら笑って披露した。

「どうして離婚しなかったの」なんてことも、率直に尋ねられるほど、いつもそこには、変わらぬ理解のもと美川さんのご主人がその傍らにいた。ご主人もまた率直に、美川さんの調子のいい時も悪い時も、映し返している。

いろんなものを抱え込みすぎるけど、大変さは見せないようにしてると美川さんはいう。一方で、夫婦での乗り越え方を尋ねると「普通の人と変わらない」、「病気病気で思わないほうがいい」とも話す。認知症のおばあちゃんを看取り、今は肺がん闘病中のご主人と共に暮らしている。「死ぬまで楽しもうと思っている」という美川さんは、私の頓珍漢な問いに対して、責任という言葉进行否定して、「自然体」で生きていけばいいと返された。ご主人に対するにじみでるような感謝もまた自然体だった。

美川さんは、病気や障害を意識することや、意識させられる局面はあったにせよ、「普通の人とそんなに変わらない」という自信があった。当事者運動への参加も、体験発表も社会への反発ではなくて、「精神障害者も普通の人と同じ」と考えてのことだった。2、3年前の整形外科医の精神病に対する失敬な言動でさえ、美川さんは礼節を尽くすことで認識を変えさせていた。目の前でしゅーんとした人にかかる言葉は、どこまでも優しく、労いに満ちた言葉かけだった。ご主人への感謝と共に紡がれた「自然体で生きていけば」、「みんながねー、元気になるように」という言葉は、私に対しても、この先の読み手にも向けられているように感じた。

4.2. 美川さんはいかに精神障害を生きてきたか

4.2.1. 好奇心はいのちの泉

預かり知らぬ発病による入院をきっかけに、美川さんは「すみれ」と出会っていた。障害を持っている人への「興味」があったからという言葉に、筆者はとらわれ、思考は迷走し続けた。

ここに、ひとまずの着地点を示したいと思う。

筆者のとらわれは、当事者である人が、同じ当事者に向かって「興味」という眼差しを向け

ることの違和感だった。ここに、筆者の偏見が邪魔をしていたことにより気付かされたのは、執筆段階に入ってからである。偏見に関する考察は、次節に譲ることとし、ここでは、「興味」という言葉に示された美川さんの生きられた経験を記していく。

「興味」は他者ではなく、自身に向かっていた。記憶にないにもかかわらず紛れもない自身の行動としてあとから突きつけられる出来事を知ったとき、自分の中にあるらしい、ただ自分ではないものの正体は、つかもうとしてもなかなかつかめない。それは「人間ではないような感じ」としか表現できないのかもしれない。“私ではないような感じ”と言い換えることもできようか。一方、「普通の人と同じ」という言葉に込められた思いは、単なるマジョリティーへの同化希求でもない。

そうではなくて、失いそうになった人（私）としての確らしさをもう一度、そして何度でも象っていき「一生懸命生きてきた」道のりを支えたのが、障害や診断名への「興味」であり、自分を確かめ知ろうとする探究心、好奇心、そして日々の楽しみや彩りをもたらす好奇心なのではないだろうか。

こうして考えを巡らせていくと、好奇心というのは、いのちをつなぐ泉のごとく、人としての誇りを確かめていく営みを支えていたように思えてくる。

4.2.2. 病気, 病気って思わないで生きる

病識のなかった美川さんは、丁寧な医師の診察と当事者仲間との出会いによって病気を受容し、障害者運動に参加し体験発表をする中で当事者主権を意識するようになり、当事者組織が運営する共同作業所の指導員として活躍し、リタイヤした現在のはのんびりとした晩年を過ごしている。

このような上滑りな物語を考察で展開するつもりはない。

美川さんが生きてきた軌跡と辿り着いた今においても、春は必ず訪れ、病気が絡みついてきている。「病気, 病気って思わないほうがいい」というのは、“けれども”なのか、“だから”なのか。

多分、どっちも、なのではないだろうか。少なくとも、病気への拒否感があって、理解やコントロールが結局、不十分だから不調の波がやってくるわけではないことだけは、断言しておきたい。

「病気, 病気って思わないで生きる」が、「精神障害者も普通の人と同じ」という思いにつながっているのは、自身への信頼、人としての誇りを失わずに生きることに通じていると筆者は思う。

臨床心理の専門家であり統合失調症当事者でもあるパトリシア・ディーガン（2022）は、「私は病気ではなく、人なのです。」と述べ、別の著書では、リカバリーの変化を花に喩えている（パトリシア・E・ディーガン2012）。花の中心部には、自身の名前が刻まれており、周りの花びらにはセクシャリティ、階級、政治、仕事、家族、などの他に、脆さや何も書かれていない花びらも存在している。

自分の中心に病気を置くのではなく、自分をおく。

あたりまえのことがなしがたくなっていくような、周囲のまなざしをもディーガン氏は指摘する。一方、美川さんは病気を意識したり、させられたりした局面への問いに対して、「あったけれども,,」のあと、言葉を継いださなかった。ここに安易な推測を挟むことは慎みたい。

病気を自分の中心におかずに、自分を置くという生きかたは、不確かなる推測を挟まずとも、十分に筆者に届くものであった。

4.2.3. 自然体で生きる

美川さんは、70代。春先の不調は毎度やってくる。自らの安全や安心が脅かされるような不調がありながらも、というよりは、不調があるからこそ、季節の移り変わりに身を任せていくような「自然体」が生き抜くコツとして出てきたように筆者は思い至っている。春は来てしまうけれど、次に必ず夏が来て秋が来て、雪降る冬が来るからだ。

嫁ぎ先と実家で重ねられた数々の歴史は、美川さんという人を多彩に象っていた。一生懸命生きてきたと述懐しながら、今が一番のんびりしているとおっしゃる。でありつつ、今も好奇心旺盛で、死ぬまで楽しもうとっていて、自然体で生きていけばいいと繰り返した。そして、インタビューの最後に、しゅんとした人への声がけを話題にした後にも、もう一度、自然体で生きていけば、と結んだ。

美川さんがいう自然体は、安全・安心が脅かされるなかであるからこそその生き抜くコツだし、自然体で生きるということは、安心・安全が脅かされても生きていけるということでもある。

心理学に関わる教科書で紹介されているマズローの欲求階層説は、人間の欲求を階層にわけ、その底辺に生理的欲求を置き、その充足の上に次の安全・安心の欲求をおく（金城 2020, 高砂2022）。そして欠乏動機ではなく存在動機によって、より高次の価値を目指すべく階層の頂点に据え置かれるのが、自己実現（self-actualization）である（高砂 2022）。

好奇心を絶やさず、病気を自分の中心に置かずに、自分を置くと推論を重ねていった、美川さんの生きられた経験から導かれてくる「自然体」のありよう。これは、階層論の頂点に位置付けられた自己実現のありようを書き替え、階層論に対して反証を試みているのかもしれない。そんなひらめきが筆者に生じてきた。

幾度となく語られた傍らに棲む家人の愛情や感謝の気持ち、そして普通の人間だと思えることは承認や愛情が満たされていることの証左だろう。一方、新たな導きとしては、その下層にある安全安心は脅かされることも抱き合わせた上で、なお自然体という自己実現（self-actualization）の姿を、美川さんは示している。

4.3. 応答せずにはいられない美川さんの生きられた経験から学ぶケアの視点

4.3.1. 利他に基づく好奇心

精神障害者への「興味」があったからという言葉に、なぜ、筆者はとらわれたのか。

それは、当事者である人が、同じ当事者に向かって「興味」という眼差しを向けることの違和感だった。この違和感は、無意識に潜むバイヤスに反することへのシグナルであった。問いを重ねながら、やがて執筆段階に入ったところでようやく明らかになってきたことは、筆者の当事者に対する安直な範疇化の弊害と偏見の存在である。当事者同士はすぐに分かり合えるはずという偏見、そして美川さんはその当事者の1人という単純な決めつけが筆者に働いていたゆえであろう。

ラグーナ出版社員で当事者の黄桜氏は、自宅療養していた時は、人との関わりを求めている、「『そもそも、自分以外に精神的に危機的状況になった人はどう生活しているのか？彼ら

はどういう人たちなのだろうか』という興味というか、素朴な疑問を抱いていた」と記している（黄桜 2015）。なるほど、素直に受けとめれば良いものを。筆者は屁理屈をこねすぎていたのだ。

美川さんは、「人」であることを確かめ関心を寄せること、1人のひととして大切にすること、なにか一括りにまとめて決めつけわかった気になってはいけないことを、筆者に教えてくれた。好奇心が一括りにまとめてわかった気になることを止めてくれる。その上で、ケアの担い手としてなすべきことは、「みんながねえ元気になるように」という美川さんの願いに倣い、利他に基づき好奇心をケアの受け手に注ぎ続けることなのではないだろうか。

4.3.2. 自然体で生きていくことへの助力

美川さんの生きられた経験には、のんびりしてばかりではいられない物語が折り重なっていた。誰かの責に帰すには忍びない事情もあった。春は必ず訪れ過ぎていくのと同じように、自らのコントロールを超えて不調は繰り返されてもいる。であるからこそ、「自然体で生きていく」ことへの助力は、応答せずにはいられないケアの視点として筆者を喚起した。

前述した、「自然体という自己実現（self-actualization）」への助力と置き換え、メイヤロフ（1971/1993）が示す自己実現（actualize himself）への助力を、美川さんからの学びとして照らし返してみよう。

美川さんが教えてくださった自然体でいられること、生きていくこととは、自分を中心におき、より自分になり、人としての誇りを確かめていくことであると筆者は理解した。メイヤロフが述べる「補充関係にある他者（appropriate others）」に示されている助力について、筆者は、現在「私を私たらしめてくれる他者」と理解している。お遍路さんの杖、同行二人の連想がぴったりはまるイメージだが、これは、伊藤（2020）神田橋（1993）の論考が大きな支えになっている。

美川さんにとって、「私を私たらしめてくれる他者（appropriate others）」は、いうまでもなく、ともに棲む家人であり、「すみれ」のなかまたちであったに違いない。もう少し出過ぎたことを言うならば、出会う人たちを、皆、「私を私たらしめてくれる他者（appropriate others）」へと育ててもいるのが美川さんなのである。整形外科医とのエピソードを、すぐに頭に浮かべる読者は少なくないだろう。

助力を考えると、ケアの担い手自らが、思い込みや決めつけやとらわれを一旦留め置き、ほどかれることに開かれていることが大事なことになるかもしれない。

ここに導かれた自然体は、仏教用語の「じねん」、つまりあるがままが思い起こされたり、ユング派から見た自己実現が浮かぶ場合もある（河合 1986）。河合（1992）が心理療法のモデルとして記す「自然（じねん）モデル」もある。「自然（じねん）モデル」とは、因果律に依らず「あるがままの在り方」を認める態度、期待する態度として、心理療法家の理想像とすら記されている（河合 1992）。

しかし、美川さんからの学びはこうした既知のモデルでは捉えきれなかった。「今が一番のんびりしている」という地平は、「治す・治る」を超え、善き・悪しに囚われていないからである。

「今が一番のんびりしている」という言葉を聞いて、思い浮かべるのは、「心の平和」である。工藤（2020）は、著書において「今、少しは平和ですか？」と尋ねて、その質問の意味を解さ

ない統合失調者はいない」と題し、自身の書簡を呈示し、「心の平和」への助力について記している。

美川さんの生きられた経験から、ケアの視点を学ばんとするとき、何よりも、この「心の平和」を願わずにはいられなくなる。そこへの助力とはいかなることであろうか。考え続けていきたい。

5. おわりに

本調査事例研究は、「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく」第5報として記した。今後も同様に地道に多様な物語の収集に努めていきたい。

研究方法に関して積み残している詳細な記述を今回も記すことができなかった。結果から考察までの分析過程やその要点については、改めて別の機会にまとめて記述することとする。

引用文献

- 朝日新聞記事（2022）強制入院や分離教育廃止勧告. 朝日新聞記事, 2022年9月14日.
- 伊藤亜紗（2020）（伊藤亜紗の利他学事始め）遍路杖としての分身ロボ. 朝日新聞記事, 2020年11月19日.
- 神田橋條治（1993）対話精神療法の骨格. 治療のこころ, 第5巻, p67-69, 花クリニック神田橋研究会発行.
- 河合隼雄（1986）心理療法論考. p13. 新曜社.
- 河合隼雄（1992）心理療法序説. p9-21. 岩波書店.
- 金城辰夫（2020）第7章動機づけ・情動. 心理学第5班補訂版, p227-228, 東京大学出版会.
- 工藤潤一郎（2020）統合失調症臨床の経験. p53. ラグーナ出版.
- 松田康子（2019）「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第1報ーにちゃんへのインタビューからー. 臨床心理発達相談室紀要, (2), p67-90.
- 松田康子（2021a）「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第3報ー高倉さんへのインタビューからー. 臨床心理発達相談室紀要, (4), p37-56
- 松田康子（2021b）「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第2報ーさくらさんへのインタビューからー. 臨床教育学研究, Vol.9, p108-125.
- 松田康子（2022）「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらくー第4報 梅宮さんへのインタビューからー. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 140号, p155-178.
- 松田康子（2022）心理的支援. 社会福祉学習双書2022, 11巻, p210-213, 社会福祉法人全国社会福祉協議会「社会福祉学習双書」編集委員会.
- 松嶋 健（2014）プシコ ナウティカーイタリア精神医療の人類学. p148, 世界思想社.
- Mayeroff, M. / 田村真・向野宣之訳（1971/1993）ケアの本質. p13. ゆみる出版.
- Mayeroff, M. / 田村真・向野宣之訳（1971/1993）ケアの本質. p29, p71-74. ゆみる出版.
- 森越まや（2022）イタリア地域精神医療の思想と実践. p119. ラグーナ出版.
- 中井久夫監修・解説（2015）中井久夫と考える患者シリーズ1, 統合失調症をたどる. p58, ラグーナ出版.
- パトリシア・E・ディーガン（2012）自分で決める回復と変化の過程としてのリカバリー. カタナ・ブラウン 編. 坂本明子監訳（2012）リカバリー, 第1章, p28-29, 金剛出版.
- パトリシア・ディーガン（2022）私のリカバリーストーリー／メディケーション・エンパワメント. 精神障害とリハビリテーション, Vol.26, No.2, p199-207.
- 高砂美樹（2022）第2章, 5-2, マズローとロジャース. 流れを読む心理学史補訂版, p72, 有斐閣アルマ.
- TBS報道特集「人間らしく生きたい」（1987）

謝辞

本報告をまとめるにあたり、調査にご協力くださった美川さんとNPO法人精神障害者回復者クラブすみれ会に心より感謝申し上げます。

本論文は、日本臨床教育学会第12回研究大会で口頭発表を行いました。フロアーからご意見をくださった方々にお礼申し上げます。大学の講義で、美川さんについて紹介をしたおりには、多くの学生さんから素直な感想もいただき、本論文をまとめるにあたり大いに参考になりました。重ねて感謝申し上げます。

Respect differences—What does a survivor’s story mean to people who have experienced mental health issues, trauma, and extreme states?

—Fifth Report: Interview with Mikawasan—

Yasuko MATSUDA

Key Words

differences and diversity, mental health issues, trauma, extreme states, survival, qualitative research

Abstract

This is the fifth report in a series of stories of survivors who experienced mental health issues, trauma, and extreme states. This case study will present a perspective on caregiving that recognizes the diversity of people with disabilities by sharing their unique lived experiences.

This case study used informal interview to examine a survivor named Mikawasan. It aims to discover narratives of individuals that caregivers cannot help but respond to. When Mikawasan entered the hospital, she felt a change into something that was “not human.” The opportunity to encounter “Sumire”, an organization of experience specialists, arose when Mikawasan fell ill. She had participated in early disability movements. She finally took the role of the instructor in “Sumire.” She said that “I will be living by self-actualization and not as a responsibility.” She exhibited sincere appreciation of her family in this interview. The points of caregiving were discovered in the story of keeping peace of mind. Additionally, new points of caring about self-actualization in Japanese culture were discovered.

